花尾（はなお）ひょうたん坊主（ぼうず）

むかしむかしのお話しじゃ。さつまのくにの郡山のある山里で、雨の降らない日が、なん日も、なん日も続いておったそうじゃ。

村人たちは、このままでは作物が枯れてしまい、やがて、飢え死にするのではないかと、心配しはじめいたそうじゃ。

そこで、雨を降らすためのお祭りをしたり、花尾の山の神様に、雨が降りますようにとお願いをしたりしたそうじゃが、いっこうに雨は降らなかったそうじゃ。

こまりはてた村人たちは、何とかしなければいけないと思い、庄屋どんの家に集まって、話し合うことにしたそうじゃ。

そして、何日も、何日も話し合いを続けたそうじゃが、なかなかよい知恵は出てこなか

ったそうじゃ。

そして、もうこれが最後の話し合いになるかも知れないと村人たちが思っていたとき、何処からともなく、ひょうひょうと旅の途中の一人の旅お坊さんが通りかかり、腕ぐみをし考え込んでいる村人に、「皆の衆、ここでいったい何の話し合いをされておられているのじゃ。わしにもひとつ、お教えねがえんかのォ」と、親しげにたんたんとした調子で話しかけてこられたということじゃ。

村人たちは、はじめは、「みょうな坊さぁじゃな、ここらへんでは見かけない坊さぁじゃ」と、ひそひそと話していたそうじゃが、やがて、「悪い坊さぁじゃないようだ」と言いながら、「じつは、これこれしかじかで・・・・・・・」とこれまでのことを、そのお坊さんに

話して聞かせたということじゃ。

話を聞いたお坊さんは、「それは大変お困りのことじゃのォ。それで、何ぞ、良い知恵でも生まれましたかのォ」と、尋ねられたそうじゃ。

そこで、庄屋どんが、「こうして、何日も、何日も村ん衆と話し合いをしているんじゃが、いっこうに良い知恵が出てこんので困っているところなんじゃ。何んぞ良い知恵はないもんじゃろうか、お坊さん」と、教えを乞うように話したそうじゃ。

すると、お坊さんは、空をながめながら、「そうじゃのォ、雨を降らすのは、天の神様のなさること、人間の知恵では、どうすることもできんからのォ」とたんたんとした調子で言いながら後ろ向きになって、しばらくゴソゴソしていましたが、何やら小さな石のよ

うなものを取り出して、「これは、旅の途中でわしの笠帽にぶっかって来たものじゃが、何か役に立つかもしれんと思うて、だいじに持ち歩いておるもんじゃ」と言って、その小石のようなものを、庄屋どんにわたしたそうじゃ。

庄屋どんは、「この坊さぁは、村ん衆が日照りで作物ができずに、生きるか死ぬかの心配をしている時に、呑気なことを言って、雨の降る方法も教えてくれないで、こんな訳のわからない小石のようなものを渡したりして、何をバカなことを言っているんだ……」と思いましたが、もらってすぐ捨てるわけにもいかず、とりあえず懐の中にしまいこんで、お坊さんには目もくれず、また、村人たちのところに行って話し合いを続けたそうじゃ。

お坊さんは、ニコニコしながら、また来たときと同じようにひょうひょうとした足取りで、山の方へ歩いて行ったそうじゃ。その後、このお坊さんの姿を見かけたものは、だれ一人としていなかったということじゃ。

それから、数日経った頃、庄屋どんの家に、村一番のトンチばあさんがやって、「庄屋さぁ、庄屋さぁ、このまえ、お坊が庄屋さぁに渡した小石みたいなものは、まだ持ってますか、いらないんだったら私にくださいな！」と、お願いしたそうじゃ。

庄屋どんは、相変わらず日照りのことでいそがしく、すっかり、そのことを忘れていました。それで、しばらくはかんにこなかった様子でしたが、「あぁ、あの小石ようなものな、え・・・あれはどこにやったかな・・・・・・・」と、言いながら家じゅうを探しまわって

おりましたが、やっと見つかったらしく、「あった、あった、こんなもんを、どうするんだ」と、言ってばあさんに手渡したそうじゃ。

それから数十日たったある日のこと、またあのトンチばあさんが、あわてた様子で、庄屋どんの家にやって来て、「庄屋さぁ、庄屋さぁ、このまえ庄屋さぁもらった、小石ようなものを畑に蒔いていたところ、不思議なことに、見る見るうちに大きくなって変な形をした実が生ってきたので、この実はいったいなんだろうと思って、庄屋さぁのところに聞きに来たところじゃ」と、言いながら庄屋どんを、そのまま畑に引っ張って行こうとしたそうじゃ。

びっくりした庄屋どんは、「ばあさん、ばあさん、あの小石みたいなものを畑に蒔いたら、

もう、変な形をした実が生った…。そうな……」と、またトンチばあさんが、冗談を言いに来たのだろうと、思いましたが「後から村ん衆といっしょに見に行くから」と言って、トンチばあさんをそのまま帰したそうじゃ。

そして、しかたなく村の衆を集めて、トンチばあさんの畑に行ったそうじゃ。

ところが、そこには、ばあさんが言ったとおり、変な形をした実が生(な)っていたそうじゃ。

それを見た、庄屋どんたちは、びっくりして「これは、あのとき坊さんが渡した小石よなものからなった実、ほんとに…、変(みょう)な格好(かっこう)をした実じゃ、何(な)にか悪(わ)いものかもしれないな、庄屋さぁ、早(は)やく叩き切ったほうがよいのではないですか」と言い出したそうじゃ。

そして、「ばあさん、なぜ、こんな変なものを蒔いたのか、何か、罰でもかぶったら、ばあさん、ばあさんのせいじゃ・・・」と責め立てたそうじゃ。

そして、いつまで経っても雨が降らないのは、あのへんてこりんな実のせいじゃないかと、うわさするようになったそうじゃ。

そのことがあって、とうとうその実は、切り落とされることになったそうじゃ。

そして、ある日のこと、村人たちが見ている前で、村一番の力持ちの吾助どんが、その実を切り落としました。地面に落ちたれた実は、真っ二つに割れてしまったそうじゃ。

ところが、どうしたことか、割れた実の中から、村人たちが、あんなに待ち望んでいた水が、こんこんと湧き出るように流れ出てくるではありませんか、そして、みるみるう

ちに田んぼや畑に、流れて行ったそうじゃ。

村人たちは、しばらくあっけにとられていたそうじゃが、「水じゃ、水じゃ」とさけんで飛び上がって喜んだそうじゃ。

そして、トンチばあさんに、「ありがとう、ありがとう」と何回も、何回も、お礼を言ったそうじゃ。

しばらくして、村人たちは、あの時の、お坊さんは、この上の、竜神(りゅうじん)さまだったのではないかと思うようになり、その後、あの小石はみたいなものは、その竜神さまの指(ゆび)の爪(つめ)だったということを知ったのでした。

それで、いまでも竜神様の指の爪は、一本ないということじゃ。

それからというもの、どんな日照(ひで)りが続いても、竜神さまの池(いけ)の水だけは、乾(かわ)くことはなく、こんこんと湧き続けているそうじゃ。

おかげでこの村の作物はどんな日照りのときでも、竜神様の水のお陰で豊かに実るようになったということじゃ。

そして、あの坊さんのことを、だれ言うことなく、ひょうひょうとして現れ、たんたんと話していた姿を思い浮かべて、「ひょうたん坊主」と呼ぶようになり、その坊さんがくれた小石から実ったものを「ひょうたん」というようになったと言うことじゃ。

創作者　きがき　寛(かん)

問合せ　０８０８３８１３３８４